

1924年 (大正13年) [20歳]

「辰雄日誌1924」No. 5 (1)

—— 1924年8月1～31日 ——

小池辰雄

Fasset eure Seelen mit Geduld. (Lukas xxi-19)

「耐え忍びて汝らの生命を全うせよ」(ルカ伝21・19)

高島鴻子おば様 召され給う [1924年8月2日]。

*

〔註参考…著作集第九巻『感想と紀行』「九、高島鴻子小母さま」(1986年9月12日)より〕

『…… 高島鴻子小母さまは、母を措いて舎兄政美を最も愛惜した婦人であつた。

…… 高島一家は私が小石川区林町九十四番地に小学校時代の大半を暮らしていたときに、東北方程遠からぬ原町十三番地なる坂道を上りかかったところの立派な邸宅に住んでおられた。その頃交際はなかったが、多少白人に近い面だちの品のいい人たちだなあと直感したことがある。そのあたりの街路を通ることしばしばあったので小学生ながら妙に印象にのこっていた。……長女にして長姉なる君代さんは今年米寿、末妹静江さんは修道尼であられる。次女の嘉代さんは数年前他界された。このような五人の兄弟姉妹の母君がここに書く高島鴻子小母さまなのである。……兄は正直のところ人物であつたので、高島鴻子さんの眼にとまり、兄も小母さまを敬慕していたことは、中学生の私にも感じられていた。……高島鴻子小母さまと私が言いたいのは、この御婦人の品格と信仰の奥床しさと愛の深さのゆえである。才媛で小学校時代に飛び級進級をされた由、……お交りは短期間であつたけれども、その印象は永遠的で極めて慕わしいからである。藤井武先生が「美しき印象を私に残した人々」という文章に於て四人を挙げておられるが、その一人がこの高島鴻子さんであり、また一人は小池政美である(藤井武全集第十二巻参照)。……

舎兄が北京で仆れたことを最も悲しんだのは勿論母であるが、非常に愛惜して下さつたのは、藤井先生とこの高島さんであつた。高島さんは、大手町に於ける内村鑑三先生の日曜の大集会に参会しておられた。兄も一高の末期頃からずっと参会していた。信仰の上でこそ高島さんは親しい小母さまであつたわけだ。また英語が両者とも日本語同様に達者であつたからその点も似ていた。高島さんは女性の温和の奥に犯すべからざる気質を備えておられたことを磯雄氏「次男」のおはなしの中から拝察した。

高島さんも若かりし日にそうであつたにちがいないが、御令嬢方は典型的な美人であつた。私自身正直驚いた。



舎兄政美が北京で召天してからあとで私が入信した……、高島さんに手紙を書いた。非常に欣んで下さった。それでお交りが始まったのであった。水戸高校生になったために、お交りは手紙の上であつた。水戸生活第二年の冬、寮に小包が届いた。誰からかと思つたら、高島鴻子とあつた。手づから羊毛で編まれたスウェーターであつた。驚きと歎びと感謝に心の中で涙した。病弱であつた私を気づかつての愛のプレゼントで、そのときの感激はいつまでも新たである。小母さまのお手紙の文字は本当に水の流れるような美しい文字である。

高島さんが北京の兄政美に書いて下さった多くの手紙も、藤井先生への手紙も、またその逆の場合のも、皆戦火のため、また別の理由のため全部喪失してしまつて残念である。小母さまから私へのお手紙としては最終のもののお大半を次に掲げたいと思う。「満二年のよき日」〔舎兄政美召天の9月22日のこと〕を迎えまして、歩みのたどしきさを感じ悲しき思いのみ一杯になります。しかし静かに241番の讃美歌「わずらわしき世をしはしのがれ」〔新讃美歌集の319番〕を唱えつつ、御聖旨のままに浸つて毎日を通してあります。

四、五年前北京「政美のこと」と御一諸に御名の故にと、凡て堪え行く御力頂きまして思うにまさる御恵頂きましたと同じに今も御恵頂きつつ、より深くより近く本統にありがたい事と存じて居ります。私はイザヤ書に引かれて毎日朝九時頃、誰れも居らぬ時御恵を頂いて居ります。今日は頂度五十章(毎日一章つつ)四節から九節が本統にありがたく、私に毎日この御言葉通りにと教えて下さいます。

辰雄さまは本統に選ばれた方と喜んでおります。お父様「父なる神のこと」の御ふところについてまでもと願つて居ります。北京「政美」もお祈り下さいます。藤井先生も助けて下さいます。本統にうれしさの極みであります。私も何卒と藤井先生におすがりいたすばかり、随分、満二年間「というのは舎兄政美が召天してから二年間のこと」が、私の環境の空気が變つて参りまして辛らすぎますが、矢張り私のより強くお父様に御すがりする為の御恵みと存じて、ありがたく頂いて居ります。多分御恵がなくては却て救いの内に入られぬ私でありませう。この世的な雑音、不信の波にかき乱されたり、さらわれたりしないために柏木「内村先生の集会」の御集り(大手町の代り)に行きたいのですがそれも出来ませんので見えぬ大きな御手にすがりつつ聖日を過ごすのも大きな御試みであります。御祈りにおすがりして幸であります。体の方は以前の様に働く事不可能になりました。

辰雄様も多勢の方々の中に在って何卒しっかりと大きい御手の中にいつも在らせらるる様念じあげて居ります。私は夜の九時の御祈りは出来なくなりましたが「政美在世中、その様に祈り合つていた」いつと定まらず静かに御胸にすがつて居ります。朝は休日でない限り唯一人ゆっくり御聖旨のままに御言葉に引かれて聖書に浸る一日の



幸なる時であります。辰雄様も何卒私の為に御祈り下さいませ。今日は善き金曜日「十字架の金曜日のこと」まことに感謝のみにあります。

何卒、御父様の御恵深からん事を

辰雄様

一九二三年十一月三日

鴻子」

私に対する遺言の如きお手紙である。いろいろな意味内容の苦難の中で高島鴻子夫人(御夫君はつとに死別された)は独り耐え忍び祈り愛して来られたことは言外から拝察できる。「お恵み」とはそういう苦難の中での神キリストへの信仰に賜る平安の心境のことである。つとりゆく御病気のため翌年の8月2日に召天された。藤井先生が告別式をいとなまれた。』

*

○1924年8月1日(金)

晴天。起床6時。入浴。昨日の疲れがすこし出てきた。朝食、明るい朝日を浴びている食堂でよき眺望をしながらしたためる。美味しいことは一段である。食後、横になってのびのびと休んだ。鳥渡散步した。お昼には、じゃがいもを斎藤様の叔母様がお料理して下さった。料理番の献立は野菜が少なくと云うので、七厘をそなえて。

午後1時頃、赤倉へ来てから初めて手紙が来た。母上様からである。誠に驚いたのは、高島様の伯母様が尿毒症で御重態との御事である。心から僕を愛して下さいる伯母様が突然御重態と聞いて、驚愕措く能わずである。而して平素の僕の御無礼申し上げている罪を思つて断腸の思いがした。

僕は早速、帽子と杖とを持って外へ出た。南を指して山路を歩いた。路を行くものは僕一人であつた。幸であつた。15分か20分歩いた。二つ目の沢へ出た。溪流がサラサラと音を立てている。四囲は全く雑木につつまれている。人は居ない。やがて僕は谷川の流れの岩の上に坐して、深き静かなる切なるお祈りに心も身も忘れてしまった。かかるお祈りは初めてである。先ず我が罪のために悔改を求めた。伯母様に神癒あらんことを祈り奉った。母上のために祈り奉った。聖霊は僕に宿り給うて、そのとき僕は僕でなかつた。自己は消滅した。自分の身体も心も自分のものでなかつた。否、消えてなかつた。ただ、主イエス基督のみ僕に在った。それが全部であつた。十字架の愛が輝いていた。大なるアーメンの聲が響いた。天然の谷川の水が和した。

ああ僕の洗礼を受くべきは正にこの時であつた。僕の帽子も草履も白樺の棒も水衣もパンツも皆僕の身体になかつた。衣類は一切自然と脱がせられていた。不思議な力が能いた。やがて清冽水の如き溪川に僕の身体はおどりこんだ。全身は不思議にもこの身を切る様な冷たき流れにひたりこんだ。頭からすっかり浴びた。全霊が清められた。これは洗礼の儀式でなかつた。これは真実なる洗礼そのものであつた。聖霊の御導きによりて僕は全く動



かされたのであった。感謝また感謝のみであった。神よ、ただ感謝のみなりき。一基督者の重態はかくも、眠れる基督者を目覚ましたることよ。夜はまた静かなるお祈りを捧げた。今夕、井本様お二人お出でになり、妙高クラブ1号館は7人となり賑わった。

写真①、溪流、祈祷の場所。50分の1。

○1924年8月2日 (土)

晴。起床6時。冷水摩擦。散歩、草の上にて祈祷。梅干と緑茶。朝食7時少し前。聖書と宗教書、読書、運動。昼食、今日は薩摩芋を煮てくださった。昼食後、小憩。斎藤力叔父様とレン子様と三人で南東、池の平へ散歩に行った。沢を越えること六つ。半里の道、往復1里である。山路1里をよくレン子さんは歩いた。8才の女の子である。彼女は頭脳は非凡、身体は丈夫、而して愛情に満ちている可愛ツ子である。彼女の真の淑女に生いたんことを祈る。御両親の御養育よろしきを得んことを。而して恐らくその成らんことを思い、喜ぶ次第である。

池の平と野尻湖を写した。帰路、赤倉温泉側面全景を写した。その杉の森は実に見事である。帰路一寸、怪我をしたがレン子様の^{ぼう}繃帯がやくだった。溪水に頭や顔を洗うのは何とも云えぬよい気持である。よき散歩をした。

写真②、池の平及び野尻湖、25分の1。写真③、赤倉を北に見る。レン子さんと叔父様、25分の1。

帰宅3時半。小憩後、キャッチボール。入浴。夕食。涼しいのは霧の下りて来たため。源平碁はすっかり強くなってしまった。入浴。就寝8時半。

花火を揚げて喜ぶ避暑客連と天を仰いで星を見て楽しむ僕とは大分心がちがう。夜の祈祷はまた伯母様のために切に。

○1924年8月3日 (日)

晴。起床6時。冷水摩擦。散歩。祈祷。聖書、ローマ書。書簡。今日はかなり暑い。温泉を浴びずに清水を浴びた。ブランコ。海や湖が懐かしくある。高島のまま様、如何とのみ案ぜられる。昨夜の夢は何であったか。これ正夢にあらざらんことを。而して之、正夢に非ずとの確信あるなりである。それこの間の夢を思いて之もまた我が心霊の目覚めんだめなり。

午後から散歩。こんなところへきて玉突をやるものがある。そんなものは東京へ行つてやるべしである。三弦線をならす馬鹿あり。谷川の水がなく。貴族くさい、ブルくさい、成金くさい、金銭くさいところは、まっぴらである。田舎はその純田舎に於て貴きところがあるのである。ああ不純ほどこいやなものはない。また、暑くて水をかぶった。清水であるから全くすてきだ。この頃の天気では河童連は大喜びだろう。夜8時頃になると眠くなる。



8時をすぎれば刻一刻と眠いばかり。トランプをして勝った。

伯母様よ、母上様よ、ああ我罪よ。政美兄上よ、我が辰雄と共にあれ。基督の如く。アーメン。

木星は南天に。火星は東天に。天の河は太空高く全宇宙に架す。アンタレスは南天に火星とその火を競いつつ。地球の直径は3,200里。太陽のは350,000里、地球の約100倍。アンタレスのは160,000,000里、太陽の約500倍。地球の軌道の直径は76,000,000里。火星の軌道のそれは102,000,000里。アンタレス自身の直径は160,000,000里と聞いて実に驚嘆するのみである。アンタレスの大、而して宇宙の大に至つては言語に絶するのみである。夏の夜のこの美観を仰がざるもの禍なる哉。政美兄上が嘆美されたこのスコルピオ座、今日もなお昔の如く、而して永遠に昔の如く。我が親友は昼も夜も我が近くあり。「夏の夜空サソリ座のスケッチあり」

○1924年8月4日 (月)

晴。起床6時。冷水摩擦。散歩。午前は日課の如く。斎藤叔母様とレン子さんが何処からかのお帰り。路傍に蛇がとぐろを巻いていたと而も蛙を半分吞んでいるとのこと。斎藤さんがそこで「蛇退治の命令を下す」と云われる。泰ちゃんと二人で出掛ける。なるほど2本の後足をあらわして頭からガブリついたところである。とぐろを巻いてニクニクしい顔をしている。そのうちに全部のんでしまった。かえるが中に居るところは猛烈に膨らんでいる。ステッキで一撃を与えた。するとキヤツはするすると網のとけるが如く身をほどいて藪の中へ遁げた。その中に蛇は木へ攀じのぼった。そこで、シャロックホルムスの如くその頭部めがけて見事な強撃をなした。蛇は、うなりはしなかったが、断末の悶えをなして、力なく垂れ下がった。ステッキにひっかけ、更に尾端を手にもちかえて、半死の蛇を引下げて戻った。こわい様であった。蛇はその中に息をふきかえたので、更に数打を加えて、血を吐くに至らしめてこれを叢中に放棄した。この間から蛇を3尾見る。脱皮をとつたり、殺したり、蛇の怨霊に祟られそうである。

お昼には、ジャガイモを焼いて食べた。何より美味しかった。また、母上様の御心の仙台的鯛味噌は実に美味である。あつくて、清水を浴びること2回、雑巾掛けや水撒きをした。消灯9時。

○1924年8月5日 (火)

晴暴風。起床5時半。昨夜は実さん高等文官試験に一番で合格した夢を見た。朝食三膳。

お昼の御飯のとき葉書が来ていた。この葉書、何の報せぞ。母上より。高島様の伯母様は遂に御許に召されたと。その意外、その突然、私達のお祈りはついに聴かれざりしか。深く主におたずねする。それは聴かれざりし祈りにして、最も聴かれた祈りであったのか



我等は知らねども主の御心に誤りなし。神の深き御恵であったのか。

『耐え忍びて汝らの生命を全うせよ』(ルカ伝21・19)

との御言葉をよく遵りて、高島鴻子伯母様は御許へ往かれた。救われたる伯母様、この世の旅路を御心にかかないで終わらせられた。まま様、幸なる哉。ああ美しかりしその御生涯。かの御病気を常にもたれて、つよくしつかり歩まれしまま様。今は御心によりて召された。誠に主はその召し給うときに於て誤り給わざりきと信ずる。まま様は歓喜と感謝と希望に満ちて、いさぎよく天国へ昇られたことと確く信ずる。今は聖国にあつて曩に召されし聖徒等と楽しき面会をして居られるであらう。政美兄上もその一人であらう。御二人は、さぞ永遠の楽しき笑みにつき、み物語をして居られることであらう。まま様のために、456番「かの時には我が知らるる如く我しらん」〔現489〕、

清き岸辺に

やがてつきて

あまつみくにに

つひにのぼらん

その日かぞへて

たまのみかどに

とももつからも

やがてあはなん

やがてあはなん

めでにしものと

やがてあはなん。

を心から歌い奉る。それから、171番「其子エス・キリストの血すべて罪より我らを潔む」〔現515〕、

十字架の血に

きよめぬれば

来よとの御声を

われはきけり

主よ われは

いまぞゆく

十字架の血にて

きよめたまへ。

を歌いまつる。然れども然れども、我が情はまた悲しみの涙に咽ぶ。

地の悲しみと天の歓びと交々、僕の胸裏に湧きて、ついに勝を占むるは、基督者の天の歓びである。然り、時至らば我もまたである。基督の再臨、信者の復活、再会。何たる希望ぞ、何たる歓びぞ、何たる恵ぞ、何たる幸ぞ、何たる平安ぞ、何たる栄ぞ。栄光すべて神に在れ。アーメン。

基督者の死は、死にして死に非ず。天国への門の通過なり。まま様の愛の御生涯の美わしかりしよ。「天に宝つめる者」はまま様にてありき。

前の日記をくつて見る。6月3日のことであつた。

母上様と、中渋谷の伯母様のところと藤井先生のところへ行つた。そのときの御はなし。そのときのまま様の一挙一動、ありありと目前に浮かぶ。あれがこの世の最後であつた。まま様のお家は道玄坂上であるのに、坂下まで僕達と一緒に来られて、御親切にお送り下



されたことを思つては、ただただ涙が浮かぶばかりである。いかなる瞬間にも愛の心が溢れていた。一言一言愛のほとばしりであつた。ママ様の御信仰とその愛、純なる基督者、ねがわくはママ様の霊、僕に宿り給いて僕を導き給わんことを。

基督者、兄上の血、岩瀬一民様の血、而してママ様の血、その美しさ、その浄さ、その貴きこと、キリストの枝なる彼等の血にキリストの血あり。熱愛の血なり。皆、僕達のために。僕の祈りは悲しみより感謝へ、飲びへ、希望へとうつつて行つた。

暴風襲来。砂塵濛々である。すこし大げさかも知れないが、家中ザラザラである。水まきを3度やった。今日もまた蛇を1匹殺した。大きらいな悪むべき蛇もその死するところを見てはよい気持はしない。生物は殺さぬがよい。^{いきもの}夜は非常にむし暑い。ほとんど夜具なしでねる。

斎藤力叔父様は絶倫居士である。1日便通2回は必ずあるとのこと。アマ納豆の醃酵したのをたべたり、ねがけにコップ3杯あずきを食べて、うまいうまいと云つて居られる。サツマ芋はお三時に皆でいただいた。芋党は叔父さんと僕。夜、「2・10・J」[ツートテンジャック]をやる。叔父さんと泰ちゃんと3人で。C.D.H. C.D.H. 初めの戦で、僕76、泰ちゃん1、叔父さん37。C.D.H. C.D.H. 2回戦で、僕58、泰ちゃん22、叔父さん4。2回とも大勝。消灯9時半、お祈り。

○1924年8月6日 (水)

晴。起床6時。朝食に母上様から戴いた鯛味噌を戴くのは実に美味しい。毎朝、卵を半熟にして戴く。冷水摩擦と散歩は例の如く。朝食のすんだとき四郎ちゃんが東京から再来。トランプを4人でやる。午前の運動をして沢へ水を浴びに行つた。山椒の木を採つて来た。お昼には母上からのトマトを皆で戴く。実に美味しかった。ここでは得られぬ次第である。母上様はかくまで僕の身体を思つて下さる。孝行者にならずして居られよう。

「母の頼みまつる主にとくかえれ」の讚美歌を思い、この世の旅路終るまで母上のために献身しなければならぬ。母上は、僕の母上は特別な母上である。非凡なる母上である。その御奮闘を思い見て、どうして安閑として母上に尽くさぬに居れようか。母上は今失明されて居られる。これまた特別な母上である。汝の母上と、亡き兄上と、在ます兄上とをよく思え。

四郎ちゃんから聞くところによると、高島鴻子伯母様は1924年8月2日午前10時35分に召されたとのこと。2日、ああ、僕の夢は正に2日の晩であつたのである。その夢は、ついに正夢、神の御報せであつたのである。何たる不思議ぞ。奇跡は神のなし給うところ、我々の知り能わざるところ。

今日も水を浴びた。キャッチボールをもりもりやつた。夜は蒸し暑かった。消灯9時半。トランプをやつて勝ち、レモンソーダ水とストロベリーソーダ水との優勝杯を飲んだ。清



水をソーダ製造機に満たして作り、各のシロップを入れて即製せるもの斎藤さんの御馳走である。

○1924年8月7日(木)

曇。昨夜、深更に至り、豪雨襲来、待ちに待ちし雨がザーザーと打ち、寝ながらその音を聞くのは実に爽快であった。乾燥しきった空気や地面がすっかり潤いを得て実に有難い次第である。それからずっと気温が下がって寝やすかった。朝は冷や冷やするくらいで、心地よき入浴をした。避暑客の帰るもの数名、しずかにつてこれまたよしである。

午前11時少し前、四郎ちゃんとキャッチボールを猛烈にやる。お昼ごはん後、午睡。実に気持がよい。今日は雨後の晴天で清浄な大気に、潤える草木、山々が実に見事。しかしかなり日中は暑く、水をかぶること^{しばしば}屢。とうとう池へ行つて泳いだ。かなり濁水。それでも心の虫はおさまった。が、斎藤さんに半分ニラマレル。

午後3時半頃、雷鳴がした。田口駅〔現在の妙高高原駅〕の前方に見える連山に雨が降っているらしい。そのうちに、天空に美わしき橋が架せられた。大なる大なる虹である。実に鮮明である。写真④B、2秒Gray、虹。

大半円を描いて山より山へ架している。二重に現われた。こんな見事な虹を未だかつて見たことがない。1時間余、この美わしき虹は東天に架していた。歎称しつつ望むこと多時である。日没と共に消えて行つた。あまり美しかったので写真に撮って見た。夕食後、皆で散歩をした。消灯9時半。地図上で今日の虹の足から足まではかつて見ると5里位らしくある。

夜は夜で東の山の上に炯々たる火星が現われている。天文の年、1924年の最もなるものである。エンケ彗星も見たいものである。今は、木星、土星も見える。

*

〔註参考…著作集 第6巻『随想集』「三、野尻湖の今昔」(1974年晩秋)より〕

「私が初めて野尻湖を知ったのは、今から半世紀前の夏のことでありました。ながわずらうをして旧制高校の第一学年をダブツタとすることです。高師附属中学の大先輩、斎藤力さんの御好意により赤倉温泉の貸宿で一夏を暮したわけでありました。……私はこの斎藤さんと暮した一夏を、感恩の念をもつて生涯忘れることができません。

多少病弱であつた私を、暑い東京からひっぱりだして、涼しい赤倉高原で保養させて下さつたのです。その頃は自動車がないではなかつたのですが、馬車が羊腸たる坂道を時折降り降りした程度で、大方は赤倉の駅との間を歩いたものです。柏原(今の黒姫)駅から野尻湖までも歩きました。ほこりっぽい道であつたことが妙に印象に残っています。

外人村から湖面をかすめて妙高を眺めたあの景色もいまだに髣髴として浮かんでき



ます。ヨットがいかにものどかに絵画的に浮かんでいました。日曜であったので、外人宣教師が天幕を張って野外礼拝をやっているのを見ました。湖はあくまでも澄明で、泳いではすまないような感じでした。ボートを浮かべ、ゆっくり漕ぎまわりましたが、……弁天島を一周して帰りました。

「赤倉の夏」と自分で呼んでいる、この夏の生活の中で、もうひとつ、いつまでも忘れられないのは、ある夕、雨あがりのあとに現われた虹のことです。野尻湖の方角にあたって大きな半円形の虹、まさに天橋と申したい見事な二重の虹が実にあざやかに現われたことです。それがなんと小一時間消えなかったのです。こんな見事な虹はその後、半世紀見たことがありませんし、おそらく私の生涯で再びあれほどの虹は見ることはないでしょう。……

ともあれ、赤倉と野尻、妙高と野尻湖というものは私にとって今から五十年前に忘れ難きものとなったのですが、それがついてこの数年前から、野尻高原大学村の一員となることによって——それは打田峻一兄のおすすめによったのですが——現実に第二の故里として迎えられ、復活して来たとは、夢か現か、実に夢にして現となったわけです。……」(「のじり大学村だより」第10号、昭和50年(1975)1月号)

○1924年8月8日(金)

晴。午前6時、起床。絶好の天気、かねてより待ち兼ねの野尻行きと今日は決めた。井本様、斎藤様も行かれるとのこと。1号館の総動員と云うことになった。10時35分の上り列車に乗るべく用意して、ゆっくりと徒歩で田口駅へ行った。大道路へ出ると、照りかえしで非常に暑かった。30分余り待った。汽車は延着した。柏原(今の黒姫)駅まで約30分。下車、井本御両人と斎藤の叔母様とレン子さんは人車、叔父様と4人は徒歩、25、26町。正午に着いた。藤屋旅館と云う。昼食が出来るまで時間あらんと思い、早速、水禪と水帽になって飛び込んだ。トテモイイ気持。水温かく、波穏やかである。昼食、鯉コク、鰻、卵ヤキ、蝦と書きたてるとすてきだが、美味しかったのは鯉コクのみ。しかし、空腹のこととて、どれも結構ではあった。脂肪をうんととり入れて、急に元気が出たようであった。食後1時間休憩。2時頃からまた泳いだ。それから遊覧発動機船に乗って、湖を一巡した。外人邑の辺から北方、妙高を望んだ景色はすてきであった。彼等はいいところに陣取ったものである。写真を撮ろうと思ったが、この時あいにく曇ってだめだった。井本、斎藤さんたちは6時20分の下り列車で帰られた。僕達3人は一泊すべく残った。

夕風はすてきで、快泳は十分味わった。入浴して小憩後、夕飯。大いに享楽せんと、やながわと鯉コクをたのんだ。食欲は頓に旺盛である。

外人のセイリングが鏡上で滑るのは実に涼しげである。山が狭っていない明るい湖である。幽邃と云うところはないが、満々たる水は泳ぎとボートには正に絶好である。月を仰



いで湖畔に涼み、寝たのは9時すこしすぎ。〔妙高を背景にした野尻湖琵琶島、野尻湖畔外人別荘地の遠景と、野尻湖周辺の地図のスケッチあり〕

○1924年8月6日 (土)

晴。起床、6時少し前。断然イイ湖！早速、ボートをかりて四郎ちゃんと乗り出す。琵琶島北岸のトロンとしたところで、僕は朝食前の一泳ぎをやった。快哉！快哉！である。8時の朝食、泰ちゃんも起きた。朝から3杯、非常なもの。9時から11時半まで、ボートを浮かべて湖上をあちこち泳ぎ且つ漕いだ。外人町の方へ行つて彼等の様子も一見して来た。子供は海水衣で泳いだり、セイリングを操ったり、面白そうに活発に遊んでいる。マーケットへ朝の買物に多数出掛けて来て居た。縦崎の眺望はよかった。ここで写真撮る。⑤25分の1、妙高、琵琶島、四郎ちゃん、泰ちゃんのボートに乗つてのところ、16ニシボル。

湖面一面鏡の如くある。どこで泳いでもすてき。トロンとしている。羊羹の切り口である。水は清澄、何とも云えぬ。水の動物なる僕は、ああこの水、水と身を跳らせ、始終魚の様である。両棲動物の様である。泳ぎに泳いだ。昼食、鯉コクに鰻にジャガイモを注文した。豪遊である。午後からまたボート。また縦横に泳ぎ廻った。どこかの水泳部の水泳大会、一寸のぞいた。龍戦に西瓜取りをやっていた。

5時、水より上る。帰りの支度。野尻湖、大いに気に入った。野尻湖に名残りおしき別れを告げた。ますます、夕風ぎである。ますます未練がのこる。が帰ることにした。自動車は6時7分に来た。6時15分に着駅。汽車はすでに来ている。乗る。すぐ出る。ジャスト・インタイムとはこのことであつた。田口駅着、靄が深くたれこめて雨が降りそう。已むを得ず自動車、7時に帰館。弦月靄の間より或は明かに或は朧ろに。そのうちに濃霧たれこめて、電灯の光、やみに朦朧としていかにも寂寞、幽境である。虫の音がそのなかに響く。何とも云えない、おちつき。入浴、真赤なコウラがひりひりする。晚餐、鯛の煮たのに、おさしみに、おつゆと鯛の三処攻め、ばかにお目出度くある。晩の団欒、皆と。就床9時半。熟睡。写真⑥、夕方、セイリング (外人) 25分の1、実に面白そう。

今日の帰りは自動車、随分贅沢をやった。生まれてこんな豪遊をやったことはないようである。野尻行豪遊費、6円であつた。しかし、この野尻行きに、得たことが三つある。それは書かぬが、心霊上のことである。やはり感謝のうちによき二日を過ごしたのは有難い次第である。

○1924年8月10日 (日)

晴。この好天気では東京は暑かろう。河童連は喜んでいだろう。宣ちゃんは外房州で真黒になっているだろう。午前、キャッチボールをもりもりやって水を浴びた。温泉より清水である。僕は水衣、運動のときはパンツだけになって、全身日光浴である。自慢ではないが、



皮膚は誠に丈夫である。大いに感謝すべきである。心臓が健全、呼吸器も完全、皮膚は丈夫、胃腸もただ弛緩のみ。かかる身体を享受して、強健なる身体とならざれば、罪は全く己れにあるのである。昨日、一昨日と運動はかなり強烈であったが、今日はさほど疲労を感じていない。有難くある。食欲も旺である。

午後から山へ登った。百合の花が美しく咲いていた。井本さんの伯母様に採って行ってあげようと思ったが、いざ切らんとするとき、その天然に咲いている美しき、やさしき姿を見ては、截る気になれず、かえってその自然を害さんとした己れのきたなさに、百合にあやまりたくなったのであった。

温泉が湧出していた。樵夫がその疲労と汚れを洗い去るべき露天風呂が出来ていた。自然はよくしたものである。また、清水の迸流しているところがあった。全く手が切れそうであった。山のぼりの人には実に有難きものである。兎が一匹とびだしたには驚いた。霧が吹き下して、いい気持だった。斎藤さんとキャッチボールをした。

じゃがいもを買いに行く。僕の顔が店頭に現われると、モウ店の奴は笑っている。言はなくても何を買うかわかっている。じゃがいも唯一の顧客。少なくとも第一の顧客であるらしい。夜、ランプの12回ゲームをやる。6回まではトップだったが、12回となって霞んでしまった。

晩に思った。1924年は僕に大切な年、有難い年と。僕は、信仰のもとに、身体を強健にし、英語、独逸語をうんと勉強することを我が全部のつとめとすることを確信した。その他を思うは不信なり、精神衰弱なりと。政美兄上のこれが命令である。僕に託せし事業である。弟たる僕は必ずこれをなしとげずんば非ずである。信、望、愛よ。健全なる身体に宿りてこの世のつとめを果たして天国の宝となれ。アーメン。

○1924年8月11日 (月)

高島鴻子伯母様のお言葉を想起する。

「高等学校生時代に本を沢山読んでお置きなさいませよ。」

本とは何であるか。それは聖書、基督教に関する書。ことに英書のことである。今最も読み得る時間を有つときであり、基礎を固めるに大切なときであるからである。

「辰雄さんはえらばれた人、しっかりお歩みになって下さいよ。」

これは誠に伯母様の願いであり、政美兄上の願いであった。而して現在、母上の喜び且つ願い給うところである。

ああ、道玄坂の下のあのお別れ。あの日の愛の交換は実に神より出でたるものであった。何より暖かき清きものであった。お別れに際してある淋しきインスピレーションの——今から思うと——ないでもなかったのはどういうものであったか。それが永別となった。

Like Christ as the select of God. 「キリストの如く 神の選びこつた」



「²⁹神は預じめ知りたまふ者を御子の像に象らせんと預じめ定め給へり。これ多くの兄弟のうちに、御子を嫡子たらせんが爲なり。」(ロマ8・29)〔英文〕

……〔英文省略〕……

午前、キャッチボール、トランプ。読書。午後、水浴び、午睡一寸。

泳ぎに行く。池に。随分浅い。泥が湧いて来る。きたない。顔はつつこめない。が運動になる。暑いから仕方がない。泳ぎが好きだから困る。時ならぬ大掃海に、お魚がビックリしたのだらう。いわなの巨大なるやつが驚いて浅瀬でピンピンやっている。始めは何かと思つて、こつちがおどかされて、おそろおそろ近寄つて見ると、鯉みたいな、うなぎみたいな魚である。とにかく蛇でないことが明瞭だったので、シメタリと捕えた。随分、威勢がよいので手からスベリ落ちること数回。逃げられんとしたこと数回である。やつとのことできりおさえて左手に握つて、大急ぎで帰つて来た。その池なるものがどうも私有のものらしく、半分人目をぬすんだわけであつたのか、しかし、この魚は飼つてあるのではなかつたのでよかった。もし、悪いことなら、魚をかえすべく、ちゃんと生かして置いた。それは悪いことではなかつたため、功労者となつて、僕が御馳走になることになった。晩食のとき焼いてもらった。皆で戴いた。僕が一番たべたが。いわなの手どり。何たる奇蹟ぞ。はからざる収穫とはこれである。曲尺約1尺ある。しかしやつぱり、生きているものの死ぬのを見ては可哀そうだった。やつぱり、いいことではなかつた。悪かつた。ジャガイモを20ばかり焚火の灰でベイクした。純粹のベイキング・ポテイトーが出来た。食堂へ引提げていったら、皆にわられた。すこし癪だった。しかし実に美味しかった。

冗談やイタズラや愛嬌はともかく。汝は不信者の間に独りなれば、神に離れぬ様に。更に、汝は世の光なりの積極的信仰生活に歩み行けよ。

○1924年8月12日 (火)

快晴。起床5時半。かねてより日本海へ、日本海へと思つていたので、好機逸すべからずとなし、早速7時半の汽車で行くべく用意した。かばんの中には写真機と水帽、水褌、タオル、それだけである。6時半に出掛けた。四郎ちゃん、泰ちゃんは気が進まぬと云うので一人で出掛けた。泳ぎとあつたら、僕はいつも大元氣である。今年、海へ行かなかつたのは残念であつたが、長々の胃腸アトニーでお医者様が、山がいいと云われるので来たわけである。今年は本当に身体を丈夫にしてやる。神様がきつとしてくださる。神様のおつしやる様に歩めばそれで間違いなしである。

1里10余町の道、朝でも相当暑い。7時20分、田口駅へ下り着いたら、汽車は45分延着とのこと。そこで「桜屋」で一休憩。やがて来た汽車の中はむす。多くの客が夜汽車であつたためかところと眠っている。

まるつきりいい天気である。黒姫2053、飯縄1917、妙高2446が見える。その中に黒沢



岳2212、神奈山1909が。火打山2462には雪が残っていた。新井町へ着く。汽車はほとんど北へ下って行く。高田市へ着く。兵隊さんが演習していた。直江津へ着いたのは9時少し過ぎ。町を北へつきぬける。大きな甘そうな西瓜がならんでいる。聞いたら100匁35銭、東京の5分の1位の値段らしい。残念ながら一人でこんなやつを食べるわけにいかぬ。白瓜の大きいのを買った。生瓜の大きいのも買って海岸でかじることにした。宿屋は直江津館と云う。海辺にあり、海に面している。生まれて初めて日本海へ出た。初めて海が眼に映じたときの快たらなかった。その紺青の色、その波の音、その砂浜、室を二階の一隅にとった。早速、水泳である。お午まで泳いだり、砂浜でやいたり、愉快で愉快でたまらない。お昼はすてきにうまい。午後2時からまた泳ぐ。室には慶応の学生が入って来て、友達になった。浜では、外語の学生と友達になった。外語の人は1ヶ月居ると云う。真黒々すけ、くろびかりである。羨ましくてたまらなかった。歯ばかり純白に光っている。

5時半まで泳いだり、こうらぼしたり、愉快で愉快で。一人であるが、大きい兄さんが僕の中で宿っている気がして、何とも云えない楽しさと愉快さで、一人で泳いでいても大きい兄さんが泳いでいらつしやるようである。大きい兄さんは泳ぎが大好き、僕も大好き。佐渡ヶ島は見えないが、実によく晴れわたって、日は始終照りつづけである。夕飯後、慶応の学生と散歩した。すてきな月夜で銀波がくだける。それから町へ少し出て、時計を一寸なおしてもらった。帰って来たのは8時頃。風はなく、月はよし、星も降るよう。波は穏やか、水はあたたかい。そこで断然、泳ぎたくなって、水褌一本となり、一人で飛び込む。誰も泳いでいない。実にすてきだ。こんな心地よき、快哉事はない。生まれて正に初めてである。月と星をながめながら、銀波を呑みながら、何たる愉快ぞ。僕の最高の快樂はこれであるかと思われた。

写真①、午前10時、汽船と日本海、5分の1、半分シボル。②、午後2時、僕、5分の1、アケツパナシ。③、午後2時、田村君、5分の1、アケツパナシ。

また、今日の日没の美観と云ったら、これまた生まれて初めてくらい。金波金波である。いかなる名画家もこの美観を如実に描写することは出来ない。筆絶の景である。夕風の泳ぎもまた快。こんな愉快な日は近頃無類のことである。おかげでお色も真黒である。

○1924年8月13日(水)

晴。曇々たる波の音を聞きながら就眠した。午前5時半、再び波の音に夢破られて起きた。波打ちぎわに出る。朝食を同室の人と共にする。午前9時から水泳。逆跳びとクロールストロークの猛練をやる。クロールがややものになってきて愉快である。逆跳は8尺〔約242cm〕位の跳込み台からである。もう少し高いのがほしい位であった。今日はお盆の入りの日らしく町は大変にぎやかであった。午後も猛烈に泳いだ。沿岸航路の汽船が数隻舷を並べている。貨物が盛んに卸されている。船舟が通っている。汽船まで遠泳したいが一人では危



ないからよした。じりじり照らされて、オカゲデオイロガマックロダと云うわけで、昔が
俵ばれ、兄上が思い出されて、自語自答。内なる兄上と物語った。

午後3時半、名残り惜しくも海と別れた。4時30分、宿を出る。全身がほてって、のど
がかわいたので駅前でアイスクリームを飲んだ。5時半に出車、7時に田口駅着。日は既
に没している。乗らんか、歩まんか、「歩まん」が勝って、すたすたと1里半を歩くことに
した。路を行くはただ一人。月が雲間から照らしてくれて、辿り行くことが出来た。霧が
降りて、服は次第にぬれて行く。身体があついでいい気持ちだった。カナブンが飛んで来
て顔に正面衝突。こっちも驚いたが、向こうはもつとクラッタことだろう。一人でおかし
くなった。赤倉の灯火がはるか上の方に見える。日くれて路遠しである。よき高原の夜となつ
た。入浴後、縁に涼んで、月と霧の糸とをながめながら、しばし休憩。9時半就床。
此の月をよそにして琵琶を聞いている俗塵はこの高原をけがすもの。すべからく帰るべ
きである。半ブルやブル位、わけのわからぬ、あわれな人間なし。

○1924年8月14日 (木)

晴。午前6時起床。入浴。10時頃、沢へ水を浴びに行った。午後から、よき水浴び場を
作るべく土木工事に鍬と鎌とを携えて行く。手と足が清水で無感覚になるまでやった。お
かげであとでほてって困った。夜は盆踊りを見た。

いわなの一件。僕の留守に人が来て、

「近頃、村の子供が池に泳ぎに来て……」

との話があったとのこと。また、

「あの池は流れる様になつていますから、いわなも鯉もはなしてあります……」

に至っては、井本さん、斎藤さん、お腹の中でおかしくてたまらなかったとのこと。僕は
居なくて幸だった。

今日は沢山のおくりものがおとなりにあった。保様からはチョコレートを僕におくつて
くださった。御好意有難いが、お腹にはあまりありがたくない。僕はお菓子より遠ざから
んとしている。お芋やなんかの方がいい。

月がすてきで、ねるのは惜しくあった。高原の月と、糸のような夢の中の様なきり薄が
穂に出てきた。秋がもはやおとずれつつあるのである。

兄上、士官学校栄転の吉報に接した。また、陸軍大学試験初審合格の報にも接す。喬さ
んも同じく合格。あたりは秀才だらけ。僕も政美兄上の絶倫の精力を宿して主の聖業に励
まん。果は如何に結ぶかは主のなし給うところ。全霊を濺いで日々を確歩せんのみ。

○1924年8月15日 (金)

雨、曇。深夜より雨が降りだして朝10時頃まで降っていた。かなり涼しく、折角持つて



来たのだと思ってネルの着物を着たが、すぐまた水衣である。雨中散歩をして動物園（入浴場）へ入って来た。烟雨にかすむ山景を外にながめて、四郎ちゃんと二人で長湯をする。午後から、山登りをする。百合の花がよく咲いていた。樵夫の露天風呂に入ってみた。野尻湖がよく臨まれた。赤倉の杉林も一目の中にある。帰りに蛇の脱皮するのを目撃した。そのぬけ殻を採ってきた。

夜、トランプをして大勝利である。お風呂の中で敲足（「バタ足」）の猛練。月は惜しいことに見えぬ。今日は十五夜であるが。斎藤さんと、アー・ユー・レディー？ イエス、ばたんをやる。この頃はよく勉強するの反対である。夕方、初めて佐渡ヶ島を臨んだ。日本海の一線実に見事。

○1924年8月16日（土）

晴。赤倉に居ること20日間、東京の苦熱を避けること20日間。どう考えても有難いことである。辰雄は新しくなりつつある。主によりて新となりつつある。身体は健康に趣きつつある。後半年をして更に恵を大ならしめ給え。水泳に、ボートに、テニスに何でもよい。規律正しき生活をなすのが第一である。放縦ならず、神の御意によつての自由なる生活を送らねば生活でない。

英、独両語に一大進歩をなさん覚悟である。毎日毎日積み上げねばならぬ。さらば、夏休み終りて学校が始まるも可なりである。高校5年も今は厭わずである。

秋風が立ってきた。桔梗、おみなえし、月見草、すすき、萩がやさしい姿を風になびかせている。午後、井本威夫君が来た。夕方、皆で散歩した。火星、木星、十六夜の月、皎々として冴えわたって、高原は銀光に溢れている。すすきは銀糸の如くである。温泉に月が宿る。10時、就床。

野尻の外人町の灯火、池の平の灯、点々として山間に瞬くは漁火かと疑うばかり。「坐ながら8月16日の朝。室から外を見た遠景のスケッチあり」

○1924年8月17日（日）

晴。朝は6時に眼が覚めるのが習慣となった。散歩に行く場所も定っている。祈祷の場所も定っている。この2、3日は烈風が吹き荒んであまり心地よくないが、東京を思えば何でもいい。泳ぎ虫は困ったものである。静かにたちかえりて祈らん。

午後、西瓜を戴く。今年になつて初めてである。実にうまかった。井本威夫君、軽井沢へ戻る。夜はトランプをやつて大勝利である。この魚攻めには殆ど閉口する。鯛は全く飽き飽きした。やはり東京の自分の家が一番である。粗食にありがたいところがある。神はやはり最も自然に人間を育て給う。何を食わん、何を衣ん、何を飲まんと思ひ煩うなかれは、いつでも真理である。お月見をする。



○1924年8月18日(月)

晴。相変わらず風が凜ぎない。12時の汽車で四郎ちゃん、泰ちゃん帰京する。一人になった。淋しいがまたよいこともある。これから少し勉強する。プランをたてよう。独立自治、しっかりせねばならぬときである。食のことや、金のことは我がことでない。我はあくまでも人格者とならざるべからずである。烈風に吹きまくられて雲は皆無、今夜の星の如く美しきはめずらしい。宇宙のはてより大風来りて、銀砂をパーツと全天に撒きちらしたかの如くである。井本御両人と斎藤さんの3人と6人で、基石の遊びをした。就床9時。

○1924年8月19日(火)

晴。烈風は未だ去らぬ。今朝は佐渡がよく見えた。5時半に起きた。山の色が実に濃くて美しい。写真④、1号館の横の道で井本さん、斎藤さん一同を妙高と月を背景として撮る。25分の1、Br. 2.5m。いわなの煮びたし実に美味なり。鯛には飽きて誰れも手を出さず。赤倉日課は此の如くである。

A.M.6:00 起床。Bath〔入浴〕、Walking〔散歩〕。

A.M.7:00 Breakfast〔朝食〕、運動1Hour、勉強1Hour E〔英語〕、Bath。

P.M.0:00 Dinner〔昼食〕、Midday-nap〔午睡〕、運動2Hour、勉強1Hour G〔独語〕、Bath。

P.M.6:00 Supper〔夕食〕、勉強1Hour E,G、Bath。

P.M.9:00 消灯。

○1924年8月20日(水)

晴。5時半起床。朝の山々の奇麗なこと。空気の清澄なること。段々、山のありがた味がわかってくる。今日は実にあつい。薄と尾みなえしとを取りに行つて来て、カンカン照らされて、水をザアザア浴びた。グレイプフルーツとかいう夏蜜柑の上等なような果物を初めていただく。ソーダ水を、林檎をいただく。午睡。入浴。西瓜を小出さんとやらからは岩魚の一件——いただいて大きな奴3切れをがぶつた。実にその天然の汁の美なるには到底菓子類の及ぶところでない。西瓜はこれで2度目。

“My Hope”〔我が希望〕は今日からである。Abide in Christ〔キリストの中にとどまる〕1st day〔第一日目〕。

独文解釈法、2頁宛。E.G. Matthew〔英語、独語のマタイ伝〕、1.5頁宛。

“My Hope”によき果のならんことを切に切に祈り奉る。

夕方、百合を掘りに山へ登った。やつと2株見つけてきて、水側へ植えた。段々客が減つていつて静かになっていい。今年は震災の後をうけて不景気だと云つて零している。

僕は人にたよらぬ。人言を耳にしない。ただ神の御言のみによる。信頼し奉つて歩む。



これが最も確實でまた僕の歩むべき道である。独立自治である。金々と云つて金の奴隷なる近代人はあわれむべきかな。食つて行ける、行けないとは何のことである。僕はどこまでも永生のため、神の栄光のため、リビングストーンの如く、ゴルドンの如く。

○1924年8月21日 (木)

晴。1週間位になるだろう。荒れ模様である。今朝、井本さんお帰京で5時半におきる。1号館も斎藤さんと4人きりになった。一日一日と客は帰り行く。そのうちに僕も帰るが、あとの数日がよい。東京へ帰つたら泳ぐかな。

神は我が義務を遂行すべきを命じ給う。汝の生命はここにあり。「急がず休まずに」。自彊術をやつて見た。入浴。9時消灯。

○1924年8月22日 (金)

雨。5時起床。雨がしめやかに降つて居る。とてもいい気持。入浴。1号館は4人ッ切り。静かでこんないいことはない。雨の赤倉は実に涼味たつぷりである。今朝、お客が帰京。食堂はがらになつた。これから独天下である。昨夜は政美兄上の夢を見た。嬉しく話した、笑つた、遊んだ。兄は永遠に我と共にある。我が内にある。「我が希望」に向かつて全霊を捧げ奉れ。節食は胃腸を壮健にするに簡単にして確実なる手段である。一時の慾に駆られて過ちすな。義務、遂行、而して神は豊に恵み給う。何事をも思い煩う勿れ。

○1924年8月23日 (土)

晴。乱れたる、誤れる、罪の過去を忘れ去り、未来に希望を抱いて、主のために歩むぞ嬉しき。この痩せたる身体は汝の罪によりて汝が得たるものなり。この迷える魂は汝の慾によりて汝が創りたるものなり。これはすべて棄て去るものなり。汝然れども自ら務むるなかれ。この醜き身体をそのまま神前に齎らして神のきよめと神のいやしに与かれよ。神の御恵はあふるるなり。時、決しておそからず。不信仰の群より離れて信仰の群と共に歩めよ。信仰によりて義とせらるべし。何と感謝なる福音ぞ。知らざる人々よ、信仰に入れよかし。やはり、希望と感謝となり。今朝の光、全高原は光と水とにゆたかにうるおえり。雨後の安息日の朝、讃美歌をひとりうたう。答うものは草木の葉音と鶯と溪流のささらぎ。1924年よ、汝よ、願わくは我に大なる力を注げよ。大なる恩恵を与えよ。我は希望を抱きて待つ。基督エス様と十字架。その下に我在るにあらずば我は在る能わざるなり。我が心は定まれり。我は義務を果たしつつ待たん。御声のまにまに。而して生くるも死ぬるも我は安らかなるなり。ああ我待たん。母上よ、兄上よ。我は主によりて御身等のものなり。アーメン。

鉄道病院長、近藤庫と云う人の一家、3人(帰京の御主人ぬき)と近しくなつて、トラン



プやなかで遊んだ。入沢様の子とも遊んだ。尋常2年で5俵遠泳をやったと云うから驚く。晩は小出氏と云う人からオハギをいただいて御馳走になる。久しぶりでうまい。斎藤叔父、叔母様御親切である。一家庭の如く暮らしている。キリンクロビールを少しおしよばんした。コップに半杯だから何でもない。薬の様である。ニガミが一寸気に入った。しかし、飲まんとする所謂ビールや酒呑みの如き気分は寸毫もない。全く一寸の薬用である。これでビールを口にすること3度だと思う。

○1924年8月24日 (日)

晴天。起床5時10分。今朝は冷や冷やしたので眼がさめた。入浴して暖まった。6時朝食をしたためた。6時半出発。今日は数日来の荒模様的一段落を利用して第3回目の野尻行きを決行した。鉄道病院々長、近藤庫氏の令息和美君(礪川小学校6年生)を伴れて行く。彼この夏から泳げるようになったとのこと。非常に泳ぎたがっている。僕も同様。よき日、逸すべからずとなして出掛けたわけである。濡れ袋をさげ白樺のステッキを携えて行く。7時10分田口駅に下りつく。乗車、8時少し前、柏原駅着。徒歩直ちに湖畔に赴く。日はよく照っているが、前2回ほどの暑さでない。秋風の立ち初めるを感じた。行人なし。山青く、稲実り、天深み渡れる。絶好の日和。野尻湖、膏あぶらを流したる如しである。大崎より直ちに右、外人別荘地へ行った。直ちに耳に聞こえて来たものは何であつたか。それは讚美歌のコーラスであつた。FUJITAで買物をすませて、泳ぐことにした。何と云つてこの湖を称美してよいかわからなかつた。技手のOne Stroke毎にくずれ行く小波その快たる言語に絶するもの。水は飲んでもいい様に澄み渡っている。外人のBoat-houseへ行ったところ、今日は勿論、安息日であるから休みである。一大四阿あずまや(テント)の如き心地よきところに集まって日曜の午前の集まりをやっていたので、洋服を来て連なつた。英語の説教を聞いた。始めのうちは、馴れなくて聞きとりにくかつたが、段々わかつて来て、終りになるにつれて、言うことが了解出来、実によきお説教と感謝して聞いた。うちに、この間読んだばかりのBrother Lawrenceの話及び“The Practice of the Presence of God”のことが説かれ、感銘するところ実に大であつた。遂に感謝の涙に咽んでしまった。首はうなだれてしまった。讚美歌には、(外国) 512 「God is our Refuge (Psalm46・1)」[神はわが避所]があり、僕も口の中でうたえて実にうれしかった。清き湖畔にひびきわたつた。小さなオルガンが置かれてあつた。老若男女小児、一大家族の如く集まって日曜の午前を清く、神を思うて過ごす彼等の生活を見ては実に羨望にたえなかつた。ひるがえつて、日本人の日曜日なるものと思うとき全く落胆せざるを得なかつた。

然り、然れども我が中にJesus Christの在り給うときに我もまた豊かなること彼等に劣らずである。誠にChristは万人のため、世のため在りきである。

一隻のボートもうかべられていない。誰れ一人道行くものもない。清く聖書を手にして



安息日を厳守する彼等の生活には感嘆せざるを得なかった。偶然にもかかるところに来合
わせたる今日の僕は実にまた恵まれたるものであった。午前の遊泳は実によかった。而し
てこの集会に列なり得たることは更に更に感謝であった。お昼をFUJYAですませた(小
僧さんが親切で室をかしてくれたため)。このお昼は、料理屋で妙な御馳走をだされたり、が
やがやする旅館の如きところで食するよりも数等上であつた。湖をながめ、黒パン半片、
白パン半片、リング2個をお腹におさめた。空腹もこれで満足した。朝がはやかったとこ
ろへ、歩いたり泳いだりしたものだから。それから湖の西側を廻つて立ヶ崎へ行つて、泳
いだ。ボートを1時間ほど乗り廻した。1時、烈風におそわれて、力漕して随分へバッタ。
近藤君は漕げないから僕一人である。

帰りは25町(約2.7km)の道を、アスパラガス2缶、トマト1缶、ソーセイジ1缶、サージ
ン1缶、インスタント・ポストム1缶、バター1ポンド、パン4斤、濡れ袋3個を引提げ
て帰つて来る。なかなかの大荷物、大分肩がへばつた。駅で列車を待つこと40分。その間
に葉書を3通書く。日没と妙高の邑、何たる美しき夕なるぞ。汽罐車のすぐつぎの車にのる。
田口から自動車。高原を涼風を切りつつ。上るのも心地よし。眼もそろそろとろとして
来たし、お腹も減つて来たし。入浴、夕食。盆おどり見物。祈祷。就床10時。近藤さんの
ところは、二人姉弟^{きょうだい}。姉さんと云うその人は18才で目白の女子大学の女学校5年生。18と
云えば愛ちゃんが生きていると18である。天に在る愛子よ、時至らば昔の如くたのしくあ
そばん。〔野尻清遊、宇賀神社の鳥居付近の景色と、龍宮ヶ鼻、琵琶ヶ崎より北方妙高を望む景色の
スケッチあり。長野県野尻湖案内図貼付〕

○1924年8月25日(月)

曇後雨。今日はもう荒れ模様、夕方から雨である。しかし、勉強にはよい。朝は昨日の
お土産でパン食、黒パンのうまいこと。東京でもこんなのではない。やはり外人のはちがう
と思った。バターはニュージーランドの実によいの。昨日のお昼と云い、今朝と云い、ま
た今日のお昼と云い、実にうまくある。お昼は、斎藤叔父様と、クラブのはおことわりで、
パンとLibbyのソーセイジとじゃがいもとInstant Postumとでいただく。これ実にすてき。
黒パンは東京のも及ばず、カルルスの風味がある。

進めよ進め進みて進め、主の御業のために、勇みて進め。主は必ず恵み給う。我豊かなり。
乏しきことあらじ。アーメン。

○1924年8月26日(火)

雨。昨夜は近藤さんの3人と、高藤^とさんと僕達4人とでトランプ、トリゴ、銭まわし等
をして遊び、10時に及んだ。雨は夕方から今朝まで降りつづき、今朝も歇^やみそうにない。
今朝は読書デーである。昨日怠けたのを挽回せずんばあらずである。雨の温泉地はしんみ



りして実によい。読書に膏がのって、今日は心地よく勉強した。濃霧に、電灯の霞むは何とも云えぬ夕景である。10時少し前、就寝。

斎藤のおばあさま、清き基督者である。実行の基督者である。自分のためと云うことになにかしたことがない。とても出来ないと言うことを学ばれた。そして、それはおばあさまの人格を見て、確かに事実である。この度の温泉行きを非常に、勿体ないこととされている。しかし自分の身体がよくなれば一時は、家の人に忙しい思いをさせてもあとで皆のためになると云って、勿体ないがと云って今日一日のばされた。明日帰られるとのことである。昨日の雨はおばあさまのための雨であった。お湯に入られること一日6回位。不幸に遭遇されて、人の同情は大であるが、おばあさまは、毫も不満不幸を感じられず、御用に在って皆逝って、その中に自分も御用をすませて、天国の再会があるのだから何にも淋しいことも悲しいこともない。どんな仕事をしていても、こんな心の平和な幸福なことはないと云って、若々しい生き生きした顔である。基督者の子供らしい元気と云うものは、年の如何に拘らずあるものである。純なる基督者の永遠変わらざる感謝、満足はとても不信の人々の解も能わざる貴きものであることを、今日、生ける純基督者を見てつくづく感じた。おばあさまは、何が一番うれしいことであるかとお訊ねすると、人がよろこぶことをすることが一番たのしい、これ意外に面白いことではないと云って居られる。而して、一両日のおばあさまに接して言行一致であるから、益々敬服する次第である。

○1924年8月27日(水)

曇後晴。午前6時起床。次第に雲が払われて行く。近藤さんの3人と小柳氏と澤田氏と斎藤さん3人と都合9人で関温泉及び燕温泉へ遠足をすることにした。9時頃出掛けた。弁当持参で。実に好い景色であった。大瀧及び大田切川を羊腸の道より見下ろしたところ、深山幽谷の名を付して可なりであった。日に照らされてなかなか暑かった。瀧の前で小柳氏に撮影してもらった。再び上って関温泉へ出た。硫黄の香が強い関温泉から燕温泉へ行く道、その谷川の流れや懸崖の景は非常によい。四郎ちゃん、泰ちゃん1ヶ月居て、この景を称し得ざりしは誠に残念であった。

大瀧までは丁度よい散歩である。やがて燕温泉が視界に展開されてくる。大田切川の谷底を匍う様は実に面白い。吊橋がかかっている。⑤写真⑤をとった。9人の列は或は長く、或は短く、誠に愉快的散歩である。11時やや廻ったころ、燕温泉へ辿りついた。かなり暑いので、喉の渴すること甚だしい。皆牛飲した。露天風呂に入った。赤倉の温泉より効きそうである。関温泉のは赤褐色であった。燕温泉はその名の如く、燕があまた飛んで巣を橋下にくついていた。宿屋が5、6軒並んでいた。浴客はかなり多く空間は見受けられない程であった。昼食をとる。渴しているので豆腐のお汁5杯、リング5個、非常なものである。1時間半ほど休憩した後、出発して谷間へ下りた。残雪のあるのには驚いた。案内者にとつ



て来てもらって皆でかじった。湯を引くのに吊橋の架してあるには驚いた。鉄鉦泉が天然の巖岩の間より湧出するのを、岩を掘ってそのまま入浴しているところは、いかにも原始的であり、また貴いところがあるようであった。険阻な道を上り上って、而してダイナマイト工事中の險道をおそろおそろ通って赤倉へと戻った。なかなか面白かった。レン子さんの健脚には感心した。途中、惣ヶ瀧、燕温泉、関温泉を一眸の中におさめ得る絶景の箇所もあり、また野尻、赤倉をもこれに加えたる実に勝れたる見晴らし台に出でたるときは、皆三嘆措く能わずであった。かくて4時半、帰宿した。写真⑥野尻。愉快なりし一日の散歩をした。景色の絶景は全く一度は行くべき価値あるものである。また大瀧位へは散歩に行くつもりである。

夕飯は美味であった。ことにビール1杯がすてきであった。火星の炯々たる光が現われる。星が降る様である。

僕は、永遠に主の僕である。人言に支配さるべき人ではない。神の言を聖霊に導かれて生きる人間である。然り、辰雄よ、雄々しかれ。確歩せよ。汝の罪は大なり。十字架を仰ぎ瞻て感謝せよ。罪の赦しを乞い奉りて。

主に依り縋^{すが}れ。主はその大なる恩恵を以て赦し給うなり。過去は何にても可なり、将来に大希望を抱きて歩め。1924年は生死の分るる年なり。よくよく主の御言をうかがいて歩め。主よ赦し給え。恵み給え。主の栄光をあらわし給え。

主は幹なり、我は枝なり。アーメン。

○1924年8月28日(木)

晴。罪は大なり、汝辰雄。1924年は残すところ4ヶ月なり。汝の救わるべきとしを逸せば最早死より外なし。汝、心せよ。神よ神よと呼びまつりて、サタンに引かるるものは誰ぞ。確っかりしろ、確っかりしろ、確っかりしろ、確っかりしろ、確っかりしろ。

10時頃から散歩に出掛けた。大瀧へ行った。不動尊王にお詣りする。それから更に足をのばして、また関温泉へ行った。今日は入浴して帰って来た。帰途、大きなふきをとって来た。足はつかれない。お昼のアスパラガスは美味しかった。食後のアイスクリーム(全西瓜)も美味しかった。小さくはあったが殆ど半分食べた。しかし自分で西瓜なんか買う身分ではないと思った。大きな西瓜を売りに来た。東京の土産にするつもりで斎藤さんと一緒にたのんだ。近藤さん、明日帰京されるので夕食後遊びに行った。花火を上げた。野尻でも揚げていた。それがよく見える。実に見晴らしのよいところである。今日はお祭であるらしい。西瓜の大きいのを、割って皆で食べたが、僕は寝がけだからやめた。近藤さんの3人の健啖健脚には驚く。しかし皆、無邪気な快活ないい人である。



○1924年8月29日(金)

晴。罪は大である。神よ、赦し給え。神の御言のみを聞かせ給え。汝貪る勿れ。何を食い、何を飲まんと思ひ煩う勿れ。主イエス・キリストの如く謙遜にして神の御聖旨に絶対に服従せしめ給え。己がためならず、人のために生命を全うせしめ給え。近藤さん、今日は演習で自動車通ぜず、帰京の一日延期となって、また遊んだ。

○1924年8月30日(土)

晴、風。起床5時半、入浴。今朝、近藤さん達帰京。愈々、無人となる。塩田工学博士の一家と僕達のみとなった。先月の27日に来たのであるから1ヶ月余りとなる。

汝は罪人の首なり。1921年以来、汝の心身は乱れたり、整つたりである。汝の罪はその以前より大なり。以後に於て更に大なり。然れども汝は大なる大なるものを神より戴けり。汝が費やし莫大なる金額、それは皆徒費なり浪費なり。母上の額に汗して得られし貴金を汝の不心得によりて徒せしとは。ああ。而も汝は汝自身の肉体を害せり。ああ、何れの罪か之より大なる。汝貪る勿れ。神よ、願わくは、この大なる罪を悉く赦し給え。忘れしめ給え。神よ、浄め給え。救い給え。アーメン。

午後12時半頃、英国人夫婦が突然来た。野尻から来たとのことである。珍しい。彼等は40代であるらしい。而も生気瀟刺である。田口駅から歩いて来た。Vacuum Flask〔水筒〕と弁当携帯である。斎藤さんが一寸世話してやって来たのである。隣りの室を一寸貸して休ませた。簡単にお昼をすませている。質素なのに感心する。やれ、宿屋だの何だのかだのとやり、おまけにろくに歩きもしない日本ブル連の散歩なるものとは大いにちがう。斎藤さんと色々語を交わしていた。僕は傍に居た。言うことは大抵わかるが、僕が答えるときは日本語である。つかえると大変であるから、否、なかなか出て来ないだろうから。彼等は日本に8年ほど居るとのこと。日本語も相当話せるし、漢字も読み得る。クズを赤倉のお土産に買つて行く。野尻まで池の平を経て歩いて帰る彼等の健脚に感ずる。両人、好い体格である。どうもちがう。活発なること彼等の如くならざれば、また精神もくさるところと思った。白田切川まで見送りに僕だけ行つた。足は速い。非常によろこんだ。僕達の親切を本当によろこんでいたようである。明治学院の先生である。Mr. Hannaford、Mrs. Hannafordと云う。野尻^{No.54}に居る。遊びにいらつしやいと云つてくれた。Washingtonの人であると。外人を知つていれば英語会話には上達することだろう。何しろ、今は何もいえないから悲観する。大いに勉強せんと思つた。

夕飯5時半。クラブには今、塩田さんと僕達だけ。実に寂寞たるものである。8時半と云うにやることもなく、眠くもありで、就寝した。



○1924年8月31日 (日)

雨。天長節。細雨、終日降る。雨中散歩をする。静かそのものである。夏の最終の日である。秋が来る。罪人の心も確りして来る。健全なる精神と健全なる身体。今の汝は汝の不健全なる身体がすべてを物語っている。目覚めよ、我が霊、心励み、力の限りに急ぎ進め。辰雄は政美なり、政美は辰雄なり。然り、正に然り。強かれ、雄々しかれ。

晚餐は美味しく戴き、今日の佳き日を祝し奉った。オムレツ、オサシミ、ナス、オツユである。静けき夕である。夜は、4人でトランプをして一家の如く楽しくあそぶ。

さて愈々、夏が去った。秋が来た。9月1日、大震記念の日が来た。明日より覚悟を固くすることは、過食せざることに、絶対になさざることに。明日はことに節食デーの日である。この日を始めとして、節食の習慣を強くすること。神様は人間に成長すべく自然の力を与えて居られる。エディソン、絶倫の彼は最も過食することを嫌ったのである。ギルマントロー、剛力者は極端なる小食主義者である。

「何を食い、何を飲み、なにを衣として思い煩う勿れ」

マタイ伝6の31。アーメン。

